Japanese association of educational psychology

母親と幼児のやりとり
～表現スタイルの母子間における関連性～

○宇佐美芳子　　無藤隆　　園田菜摘
（慶應義塾大学）　（お茶の水女子大学）

【目的】　子どもが、他者の気持ちや欲求を推測する能力同様、自己の欲求や意図を伝えるための適切な自己主張が出来る能力を獲得することは重要である。そのための有効な言語的スキルとして、間接的要求表現というものが挙げられる。

間接的要求表現について、母子の間でどう対応し、それが用いられる場面とどう関連しているのかを見た研究は少ない。母子相互作用の中で、子どもはコミュニケーションの仕方を内在化していく可能性があるので、子どもの自己調整的な主張の仕方の獲得については、母子の相互交渉場面を細かく見ていく必要がある。さらに、母子間のやりとりは、状況、文脈、場面などの影響を受けていることも報告されており、複数の場面を観察することで、母子間のコミュニケーション方略の使用はその二者間において特徴的なスタイルなのか、それとも場面・文脈に依存したものなのかを調べる必要がある。

以上のことをふまえて、本研究では、母親による統制度の高い場面（飲食場面）と低い場面（粘土遊び場面）を設定し、以下の３つの仮説を検討する。①場面によって、母子は異なる要求表現を表出するだろう。②母親の要求表現スタイルが幼児期の子どもの言語スタイルに関連するるだろう。③母子ともに、どの要求表現を多く話すかには場面の制約を受けず、ある程度一貫性があるだろう。

【方法】 **(1)協力者**　東京とその近郊に住む４歳児(4;6)22名、５歳児(5;4)28名、６歳児(6;3)４名と、その母親の合計５４組のペアが家庭で観察された。

(2)手続き　各家庭を一人の観察者が訪問し、２つの場面での母子のやりとりをそれぞれ20分ほどずつビデオに録画した。

(3)コード化　J. Dunn & P. Munn(1987), G. Kochanska(1992), A. R. Eisenberg(1992)らの研究を参考にしつつ、観察者がビデオから、発話を取り出し、まず、直接相手への要求を言葉上に表現しているのか、間接的に相手への要求を表しているのか、自分の意図を表しているのか、の３つに大別し、さらにそれぞれを、相手の思惑には構わず要求しているのか、要求に従うかどうかを相手の判断に委ねる要求の仕方をしているのか、の２つに分けて、発話そのもののカテゴリー分けを行った。

【結果と考察】 **①要求表現の使い分けに対する場面による影響**　(a)母親の発話:直接的コントロール（強）の発話頻度は、飲食場面での方が粘土遊び場面でよりも多かった（$t=-2.07, p<.01$）。それとは逆に、直接的コントロール（弱）（$t=6.84, p<.01$）、間接的コントロール（弱）（$t=4.56, p<.01$）、意図暗示（$t=2.76, p<.05$）の発話は、粘土遊び場面での方が飲食場面でよりも多かった。　(b)子どもの発話:直接的コントロール（強）（$t=3.92, p<.01$）、直接的コントロール（弱）（$t=5.00, p<.01$）、間接的コントロール（弱）（$t=2.42, p<.05$）、意図宣言（$t=5.22, p<.01$）の発話が、粘土遊び場面での方が飲食場面でよりも多かった。

②要求表現の使用スタイルに関する母子間での対応　(a)粘土場面：間接的コントロール（強）、間接的コントロール（弱）、意図宣言の発話頻度において、(b)飲食場面：直接的コントロール（強）、間接的コントロール（強）の発話頻度において、母子の間に相関が見られた。

③要求表現の使用に関する母子それぞれの個人の特徴　(a)母親：間接的コントロール（強）、間接的コントロール（弱）、意図暗示の発話頻度において、(b)子ども：間接的コントロール（強）、意図暗示の発話頻度において、場面を超えての一貫性が見られた。

以上から、母親も子どもも、文脈を考慮に入れながら、方略を使い分けていること、自己調節機能を反映した自己主張方略は、母子ともに、場面を超えて用いられており、このことが自己主張のあり方の特徴を示していることが明らかになった。

NII-Electronic Library Service